

●この会場について（過去のことについて）

この会場“1000KITA HIROBA”は楽只市営住宅7棟にあります。住所は京都市北区紫野北花ノ坊町、このあたりは別名で楽只（らくし）地区、千本地区とも呼ばれます。紫野という町名は1941年に改称された名で、それ以前は鷹野と呼ばれていました。

市営住宅以前のここ楽只地区は不良住宅の密集地でしたが、その姿はもう全く見られません。1950年後半から建造され始めて今ある市営住宅ですが、この7棟などの一部は2年後には取り壊される計画になっており、地区の景観は再び変わろうとしています。京都は碁盤の目の街路や歴史的建造物それに杜や山などが、古都として構造を長くとどめています。しかし安定した構造であっても、一世紀にも満たない時間の間に都市の景観は驚くほど大きな変化をしています。

天空の星の移動をずっと観察していても、じっと動かないように見えるのと同じで、変化するものにずっと寄り添っていると、そのものの変化に人は気付きにくいものです。われわれは楽只地区を探索し古い写真たちに出会う事で、そのような変化を見つけることになりました。

変化の発見を与えるだけでなく、懐古や郷愁、あるいは新鮮な映像経験、または写真そのものの骨董的価値など、出会った古い写真は私達を様々に魅了します。

●シーンと空間について（今のことについて）

シーンから空間へ、空間からシーンへ。

シーン＝平面的。空間＝立体的。シーン＝視覚的。空間＝身体的。

シーン⇄空間、イメージの往復を繰り返して建築家は設計を行っており、この時のシーンと空間はメソッドとしても機能します。つくられた建築は、実際の場でシーンと空間を人々にむけて絶えず生み出し続けます。

「あるシーンをとらえた写真」などと表現される事がありますが、「シーン」という言葉は光景、場面などを意味し、“決闘シーン、ラブシーン、ラストシーン、アクションシーン…”などとも言うように、「～してる」「～おこってる」と進行している時間を持っています。

しかし写真映像は、人の認識を超える一瞬の時間で静止しています。そこに「～している」暇も隙きもありません。ブレや長時間露光など、人が認識できる時間や運動を撮影したとしても、“写真”として静止し、実際の現実の見た目とは異なる映像を私たちへ提示し抽象的な姿を暴露するだけで「～している」は一瞬（画）として折り畳まれてしまいます。ですがそれでも人は静止した一つの写真の中に「～している」という時間＝シーンを見出します。さらには2つ以上の写真が親しい距離を持って並ぶと、写真と写真の間にもシーンを見出します。写真と写真の間には写真は無く、あるのは関係性です。この関係性を写真性とよべるのでしょうか？わかることは、この関係性は現実の空間にあってこそ発生するものであり、だから経験的であり、生々しさを持つということです。

●境界あるいは枠について（わからないことについて）

シーンを体験するとき、“人”と“シーンが現れている空間”との関係は対峙しています。人（みている）がいる空間と、シーンのある（みられている）空間が別れている状態です。

建ものの中から窓（枠）越しに外の景色を見る時、外の景色がシーンになり、外から建てものの中を窓越しに見る時、部屋の中の様子がシーンになります。外から建てものへ、建てものから外へ身体が移動すると空間は入れかわります。シーンも入れかわります、移りかわります（ただし逃げるように、決して手の届かないまま）。

人が変化に気付く機会はどんな時に訪れるでしょうか。

姿の変化と、人の生活と心の変化は同じ歩みをたどっているでしょうか。

シーンと空間が入れかわる境界を人はみつけることはできるでしょうか。

できたとして、それは一体どうしてなのでしょう。すごいですね。